



JIA SHIBUYA ARCHI PRIZE 2024



ALL 34 ENTRIES



JIA 渋谷アーキプライズ 2024 概要

【作品募集】

応募期間	2024 年 8 月 1 日～9 月 30 日
募集方法	JIA/ 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部、渋谷地域会ホームページに掲載 フライヤー（区内掲示板、大学、施設、店舗等に掲示、配布）
応募方法	JIA 渋谷地域会ホームページ上、 「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」専用ページ「応募フォーム」より
応募総数	総数 34 点（実数 33 作品）

【審査】

審査期間	2024 年 10 月 1 日～12 月 14 日 一次審査 2024 年 12 月 16 日～ 1 月 21 日 二次審査
審査方法	日本建築家協会 関東甲信越支部 渋谷地域会内審査チームによる 写真選考および個別確認 JIA 渋谷地域会「まち歩きトレッキング（イベント）」において個別訪問
審査基準	渋谷らしさ・コミュニティ性・オリジナリティ・デザインなど
審査結果	一次審査通過作品：5 点 「駒テラス西参道」 「渋谷区立 北谷公園」 「立食うどん絵空事」 「東京メトロ銀座線渋谷駅」 「ファミリーミール カリフラワー」
二次審査結果	アーキプライズ 2024：2 点 「駒テラス西参道」 「東京メトロ銀座線渋谷駅」
結果発表	2025 年 1 月 30 日（木） JIA 渋谷地域会ホームページ上及び応募者へメール通知

【表彰式】

日時	2025 年 3 月 12 日（水）
場所	渋谷区役所 801 会議室

【主催者等】

主催	公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 渋谷地域会
後援	渋谷区



主催者ごあいさつ

JIA 渋谷アーキプライズ 2024 は、渋谷を中心として活動している建築家の集まりである JIA 渋谷が、今回初めての試みとして企画、実施いたしました。渋谷という都市の中で、「渋谷らしさ」をテーマに、「楽しい」「気持ちの良い」場所、空間、建築、イベントなど、様々な「建築的な取り組み」について幅広く応募し、建築家の視点で数点を選び推薦者を表彰する、というものです。

今回は 34 の応募がありましたが、その内容は誰もが認めるような渋谷のアイコン、長く継承される伝統行事、新しい画期的な建築、若い世代による元気な創作物、思い出の場所、など予想を超えて多岐に渡るものでした。このことは単に現代の多様性を映すだけでなく、高度経済成長時代をはるか昔に終え成熟した日本社会の中には、すでに人々の記憶に残るレガシーやストックがあること、更に未来に向けた「新しい動き」が数多く現れてきていることを示しています。

この賞はその「新しい動き」を敏感に捉え、推薦・提示していただいた方を表彰するものですが、同時にその対象の所有者や管理者の方々、更には設計者や施工者の方々にも敬意を表するものです。

今回は、明治神宮の参道に沿った首都高速道路高架下を、子供達を中心に世代を超えた多くの人々が集う場所として楽しく再生した「駒テラス西参道」と、渋谷の特殊な地形による都市交通施設の構成を、未来に向けて美しく造り替えた「東京メトロ銀座線渋谷駅」の 2 点を受賞の対象として選びました。

この賞を通じて、まちの主役である市民の方々と多くのクリエイター達が都市の魅力について共に考え、自分たちのまちをより良くするために協働するきっかけになることを願っています。

最後に、この賞に企画時より賛同し、不慣れな進捗に並走し、後援して下さった長谷部健渋谷区長と渋谷区関係部署の担当の方々に心より感謝いたします。

JIA 渋谷地域会 代表 高階 澄人



お祝いのことば

このたびは「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」の初めての開催、おめでとうございます。

企画当初、応募対象を建築物に限定しないと聞いたときにはどのような応募があるのか予想が付かず期待が高まったのを覚えています。

今回応募いただいた 34 の作品は、いずれも応募理由を含めユニークで、それぞれの視点から「渋谷らしさ」を感じられるものでした。渋谷に存在する数多のモノや空間、活動等が皆さんの想いを通じて唯一無二の「作品」となり、渋谷の新たな一面を広く知っていただく機会になったと思っています。

「JIA 渋谷アーキプライズ」が、渋谷区が基本構想に掲げる「愛せる場所と仲間を、誰もが持てる街」の実現と、創造性豊かなまちの実現につながることを期待し、お祝いの言葉とさせていただきます。

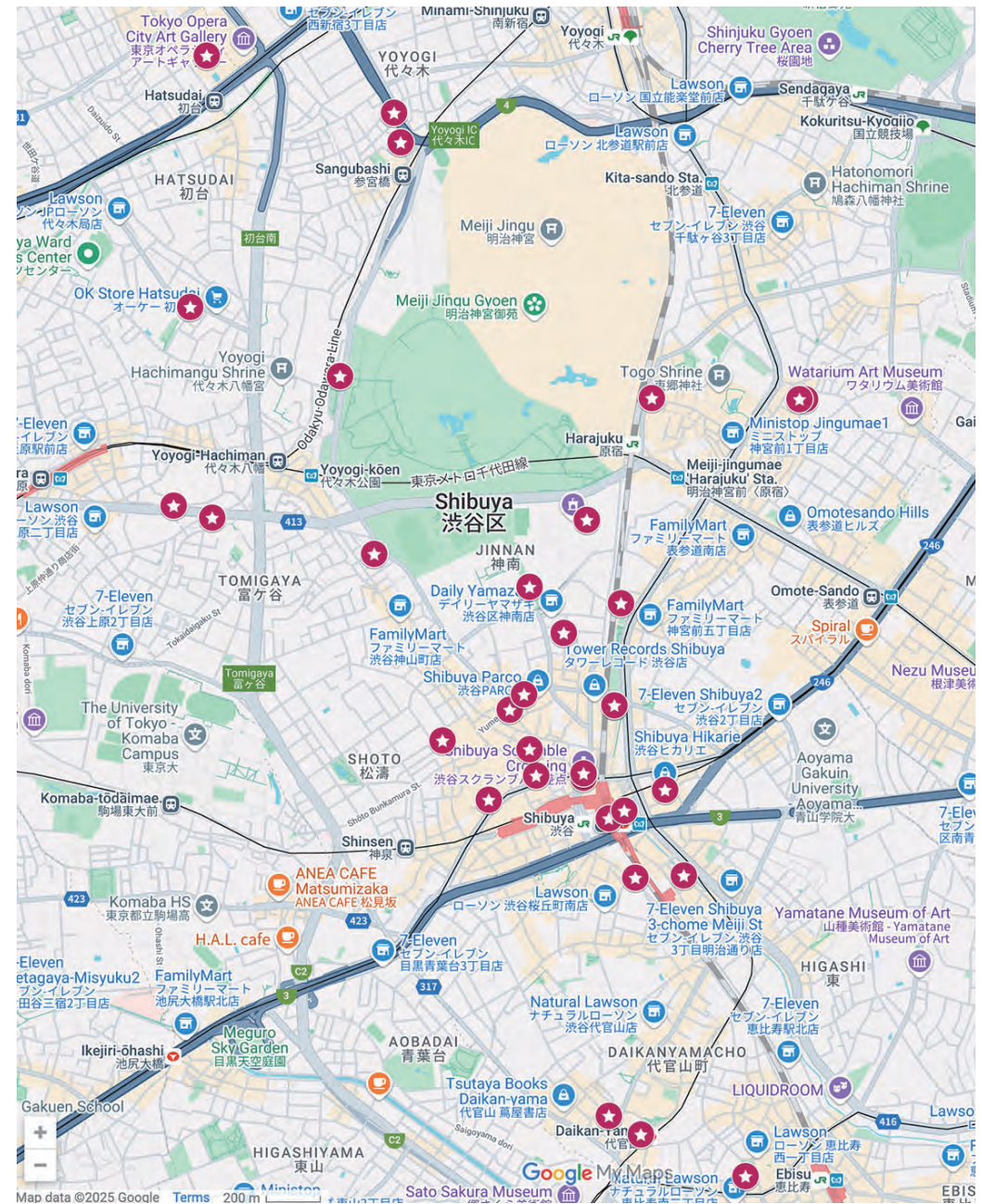
渋谷区長 長谷部 健

応募作品リスト

(受賞二作品以下五十音順)

1. 駒テラス西参道 (受賞)
2. 東京メトロ銀座線渋谷駅 (受賞)
3. 501 (宮下パーク屋上)
4. 国立代々木競技場
5. コムス上原
6. 金王八幡宮例大祭 2023
7. THE TOKYO TOILET @ Ebisu Park | Wonderwall
8. シスコ坂
9. シブカツにてみんなでイスでシットビクス®
10. シブテナレンタルスペース
11. SHIBUYA109
12. 渋谷アーティスト・イン・レジデンス
13. 渋谷川のゆらめきに投げキッス
14. 渋谷区立 北谷公園 (一次審査通過)
15. 渋谷スカイ
16. 渋谷スクランブル交差点
17. 渋谷のマック
18. 新国立劇場
19. Sponge
20. 竹下通り
21. 立食いうどん絵空事 (一次審査通過)
22. 立ち食いうどん「絵空事」 (一次審査通過)
23. 東急文化村
24. はるのおがわコミュニティパークトイレ
25. 百軒店付近
26. HULIC & New SHIBUYA
27. ファミリーミール カリフラワー (一次審査通過)
28. Fuglen Tokyo
29. Forestgate Daikanyama と TENOHA 代官山
30. 複雑化する縦移動
31. MIYASHITA PARK
32. 代々木公園ケヤキ並木と代々木競技場第一体育館
33. La Cave
34. LITTLE NAP COFFEE

応募作品マップ





応募理由

駒テラス西参道は明治神宮に繋がる西参道の整備事業に伴い、観る将の聖地かつ地域の交流拠点となるべく設立されました。

首都高4号線の高架下に建設されており、コンテナをモチーフとした4棟の機能別の建物と高架の柱の間を縫ってそれらを繋ぐウッドデッキ公園により構成されます。建物は南から北に向かってホール、ギャラリー、スタジオ、カフェ、公園という並びで一体になっていることで、様々な場面で多様な目的を持った人々が集まれる場所になっています。各コンテナの間はベンチが設置されているオープンスペースになっており、施設のおもちゃで自由に遊べるようになっています。スペースが限られ子ども達の居場所が失われがちな都心において平日休日問わず集い、自由に遊べる場となっています。また、屋外に将棋の大盤が道路に向かって設置されていることで、建物内に入らずとも将棋に触れる機会を作り出しています。さらに夜間には施設の光が漏れ出て、参道を明るく照らしています。常駐しているコミュニティ・コーディネーター（C.C.）が施設を訪れる人々を繋げる役割を担い、渋谷区や将棋連盟、地域住民等と共創しながらこの施設を活用し、地域を盛り上げています。

既存の高架下といえば、駐車場などの暗くてまちを分断する空間としてのイメージが強いですが、駒テラス西参道は「まちのむすびめ」となっています。文化の成熟はそのまちの発展には欠かせないものとして、今後もこのまちの、渋谷区の、居心地の良い環境創りに大いに寄与する、と感じております。



審査員コメント

都市の中で使いにくく使われていない土地、いわゆるレフトオバースペースを最大限に活用した好例と言えます。鉄道の高架下を商業利用したり公園化した例は多くありますが、ここでは高度経済成長時代に、明治神宮西参道というコンテキストに構わず架けてしまった首都高速道路の高架下に、パブリックスペースを設けて将棋と組み合わせることにより、昼夜を問わずたくさんの人が集まる場所を創り出しています。嬉々として夕方まで遊ぶ子どもたちと、迎えにくるお母さんたちの姿が多くみられます。都市に暮らす子どもにとってはサードプレイスのような存在なのかもしれません。高架下ゆえの直線状の再開発により、参道に対するリスペクトも少し取り戻せているようです。

夜の雰囲気がとても良いのは良く練られた照明計画によっているものと思います。怖くない程度の明るさを維持しながら、眩し過ぎないようにアンブレアの工夫がされているようです。

大きな投資をせずとも、デザインや工夫によりライブリーな空間を生み出すことができる、というローコスト再開発のお手本となるプロジェクトではありますが、首都高速道路下の公的な利用などはやはり渋谷区のような行政の旗振りがないと、実現が難しいという側面もあります。



応募理由

ひしめき合うような駅周辺の環境の中で、中からも外からも目を引く建造物であるという点、銀座線や直下の明治通りの往来を妨げないよう、空中でスライドさせるように完成させたという、この立地ならではの構造という点からです。



審査員コメント

「地下鉄なのにどうして空中を走ってるの？」とは銀座線の渋谷駅周辺で86年前から聞かれる有名な会話です。以前の銀座線渋谷駅は東急百貨店東横店の3階部分に収められていましたが、今回の再開発により、ヒカリエとスクランブルの間に架けられた橋のような構造の駅に生まれ変わりました。

今後は「地下鉄の駅なのにどうして空中に浮いているの？」という会話が渋谷で聞かれるようになるかもしれません。この空中ホームの屋根部分は、空中通路「スカイデッキ（仮）」として将来一般にも開放される予定です。

この新しい「渋谷の特徴」を設計したのは土木と建築を跨ぐ建築家、内藤廣氏です。

501（宮下パーク屋上）

所在地：渋谷区神宮前 6-20-10

応募者：古本 結衣



応募理由

ここは渋谷の中心地にある宮下パークの屋上に位置し、都市の喧騒から一歩離れたユニークな空間です。特にアメリカのクラシックな Airstream ワゴンが設置されており、そのレトロでインダストリアルなデザインが渋谷の多様性と新旧が交差する魅力を体現していると思ったため。

また、伝統と先進が共存し多様な文化や感性が交わる場所を“渋谷らしさ”と捉え、このワゴンと周囲のデザインはその象徴と言えるであろうから。

審査員コメント

宮下パークは渋谷駅界隈では一種気合の入った施設です。駐車場と空中公園にスポーツ施設、ショッピングモール、ホテルが加わり全体形状も含め大型客船を思わせます。

エアストリームはその屋上に放置され、レトロフューチャーなピークルは未知の惑星で置き去りにされた探検車のような想像をさせます。

まるで遺跡のようで偶然なのかもしれませんが、実はここが駐車場であったことを想起します。

国立代々木競技場

所在地：渋谷区神南 2-1-1

応募者：小島 健士郎



応募理由

1964 年の東京オリンピックに向けた丹下健三による設計。建築家と構造家（エンジニア）がうまく噛み合った例。

空にそびえ立つコンクリートの軽快さがよい。

審査員コメント

とても渋谷らしく、また代々木公園のみならず東京や日本を代表する風景だと思います。

1964 年の初めての東京オリンピックに向けて綿密に計画された軸線、道路、植樹、公園、体育館などが一体となって美しい風景を作り出していて、第一・第二体育館とも 60 年を経て東京の重要なレガシーとなっています。

第一体育館は 4000㎡もの大きな空間を無柱空間とするため、二本のケーブルで支えられる吊り構造で軽快に屋根を架けています。第二体育館は 1 本のケーブルです。信じられません。この構造形式でこれほどのスケール感を持った建物は滅多にありません。

世界的に著名な建築家 故丹下健三氏の代表作の一つです。

5

コムス上原

所在地：渋谷区上原 1-11-12

応募者：東 伊吹



応募理由

無駄がないデザインが好みます。

審査員コメント

一つの建築に目が留まる、ということはその建築に何かしらの魅力的な特徴があることによるのではないのでしょうか。

応募文には「無駄がないデザインが好み」と書かれていますが、数多ある建築のある中から、「この建物が好き」と言われて、設計者はとても嬉しく感じるに違いありません。そして応募者の中では「無駄のないデザイン」と「渋谷らしさ」がどこかで結びついているのではないかと想像します。「そのまちで暮らしてみたい、この住宅に住みたい、あのお店に行ってみたい」といった思いを抱いていただけるような魅力のある建築や都市を目指して、我々建築家は設計をしています。一つの建築に目を留めてくださったことに感謝すると同時に、これからも多くの建築やまち（とりわけ渋谷）を見て、またこの賞に応募してくださることをお待ちしております。

6

金王八幡宮例大祭 2023

所在地：渋谷区宇田川町 21 スクランブル交差点

応募者：徳山 真樹



応募理由

数百年続く渋谷最大のお祭りで、コロナ明け後の久しぶりの祭ともなり、賑わいと活気を感じる。渋谷という大都市にも多数の各町会があることに感動したため。

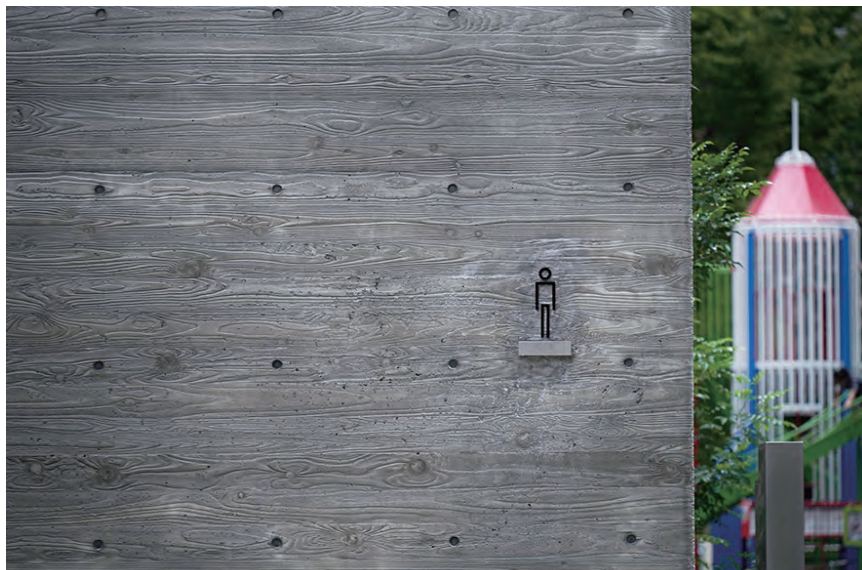
審査員コメント

このような歴史のある伝統的なアクティビティが現代も大都会渋谷で引き継がれていることは、都市の持続性という観点からも極めて重要なことだと思います。15 の町会、14 基の神輿が参加して、4 日間も開催されることにもこの大祭の求心力が感じられます。

地域に根付く伝統行事がその純粋さを保ちつつ、商業的にも大きな効果をもたらせることができるのも世界に冠たる「観光地＝渋谷」ならではの楽しみです。

所在地：恵比寿公園

応募者：堀澤 葵



応募理由

恵比寿公園に訪れた際にこのトイレがカッコいいと思ったから。

審査員コメント

カッコいいと思うことは全ての行動を明るい気持ちで前向きにさせるように思います。

ましてやどうしても「暗い、汚い、臭い」といったネガティブなイメージを与えがちな「公園のトイレ」が、カッコいいと見られるように変身するのは素晴らしいことだと思います。

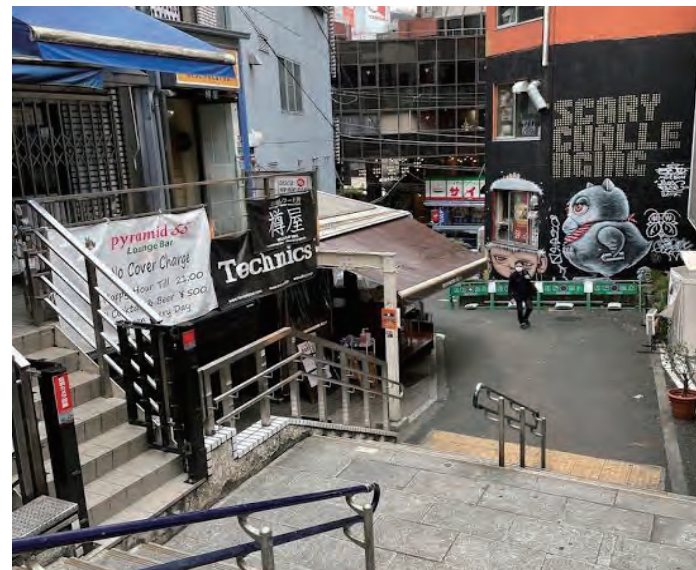
この恵比寿公園のトイレは「The Tokyo Toilet」プロジェクトにより、渋谷区内の17ヶ所の公共トイレ整備事業の一つとして完成しました。それぞれのトイレには世界的に著名な建築家やデザイナーが関わり、デザインや機能、快適性、安全性など多くの課題に斬新なアイデアで取り組んでいます。

更にこのトイレ整備事業は、映画監督ヴィム・ヴェンダースにより『Perfect Days』と題して映画化されるまでに至ります。

平山さん（映画に登場する役所広司演じるトイレ管理人）と共に、カッコいいトイレを大切に気持ちよく使って行きたいですね。

所在地：渋谷区宇田川町 11-11

応募者：南條 優吾



応募理由

クラブカルチャーを生んだ多大な功績。

審査員コメント

応募写真はとても渋谷らしい風景を切り取っていると思います。

駅から離れていることから渋谷の中では家賃がそう高くなく、時代を通じて若者たちが集いやすいエリアであるために、音楽やファッションを中心とした文化の震源地のような場所であり続けています。

地形の複雑さに加え、少し猥雑でアブない雰囲気を醸し出していることがさらに魅力を増し、「若者の街、渋谷」を代表する場所となっています。自然発生的に始まり、年月を重ねても発信を継続していることから、このエリアはまさに渋谷的な場所でありシブヤカルチャーの震源地のような場所であると言えます。

ところで、非公式でありながらこの坂の名前にまでなった『レコードショップ CISCO』は、実は西武グループが若者戦略の一つとして渋谷西武の中に作った『Be-in』という店舗の中で産声をあげ、その後いくつかの変遷をへて、1983年にこの坂に面する第2柳光ビルに移転して来ます。

残念ながら『CISCO』は2007年に閉店してしましますが、ブルーのビニールを抱えて通ったこの坂の風景は、音楽と共に記憶に残りつ続けます

所在地：渋谷区渋谷 2-21-1 ヒカリエ

応募者：白井 ヨシ



応募理由

ちょっぴりおしゃれだけど心地よいイスやベンチ。そんなオアシスのような場所を渋谷区で見つけています。今は、駅から降りたら迷路のように迷っています（笑）。だけど大人になってもいろんな刺激が溢れている場所。

常に変化してる場所 - 私たちもそうありたい。そこでステキなイスがあれば渋谷区のおアシスとしてみんなでシットビクスしています。いろんな渋谷のイスがあればどこでも誰でもシットビクスをしています。

審査員コメント

先にシットビクスを行うという目的があって、それに見合った場所（イスやベンチ）を渋谷の街中で探すということは新鮮で、それだけで渋谷という街への眼差しが変化してきそうです。

渋谷には、公共空間や大規模商業施設などが多いことから、思いのほかイスやベンチで休むことができるスペースが多いことに気付きます。そんな場所でシットビクスをしている光景を思い浮かべるだけで、心身共にリフレッシュできそうです。

所在地：渋谷区宇田川町 30-7（解体済）

所在地：渋谷区猿楽町 25-3（現）

応募者：小澤 拓夢



応募理由

渋谷に地域密着の不動産屋、シブテナが企画するレンタルスペース群。

宇田川町店舗（写真左）は平日は不動産店舗として利用し、土日は企業へ貸し出しイベントスペースに変わる。特徴的な斜め壁の外観は、シート張り広告張り込むことで広告の立体化を可能にしている。

猿楽町店舗（写真右）はイベントで使わない時も、ただ店舗を閉めるだけでは代官山の人に申し訳ないという理由から、ショッピング途中で休めるようなベンチを作り町に寄り添ったイベントスペースを企画している。

審査員コメント

不動産会社の店舗を、営業している時間以外をレンタルスペースとして貸し出して地域に関わろうという取り組みは興味深いです。街との関わり方は、店舗としての用途に限定する必要はなく可変であっていい。その都度あるニーズに合わせて建物用途を変えるという発想は、所有権や実業のある建築の成り立ちからすると実現が難しいですが、レンタルスペースという真っさらな空間として捉え、建築の可能性を広げようとする不動産会社ならではの試みであるように思います。

応募にあった代官山のレンタルスペースは、変化のスピードが速い渋谷というまちのニーズを掘り起こした試みと言えるでしょう。

所在地：渋谷区道玄坂 2-29-1

応募者：松田 菜緒



応募理由

渋谷と聞いて一番最初に頭に浮かぶ建築。ロゴデザインも変わり、時代と共に変化、成長している感じが良い。

審査員コメント

一番渋谷らしい建物は？と聞くと多くの方が 109 を挙げるのではないのでしょうか。「谷戸地」の特徴である、Y 字型の交差点に面した敷地にくっきりとランドマークとして映るよう、巧みにデザインされています。ニューヨークのフラットアイアンビルのような役割を担う渋谷の強烈なアイコンです。

闇市に始まり、小さな商店街が軒を連ねていたこの地において、そのコンテキストをすくい上げ小さなテナントを積層し詰め込むように構成したことは、後にプチプライスのアパレルやコスメティックスを扱うスモールテナントの出店を加速させ、そのカスタマーである若い女性を強烈に惹き寄せ、マルキュー、ギャル、JK といったヤングカルチャーを生み出す聖地にまでなります。

建築が都市を形づくり、都市が建築を際立たせるといった理想的な関係性を生み出し、文化の震源地になったこの建築をデザインをしたのは建築家、竹山英氏です。

所在地：渋谷区 6-22-8（神宮通公園）

応募者：Sachi Sawamura / サワムラ・サチ



応募理由

私の夢は、人々がリラックスできる建物や空間を創造する建築家になることです。

このコンテストは、私の夢に向かって進むための素晴らしい機会です。デザインの経験はありませんが、私はコミュニティに利益をもたらす、街に新たな興奮をもたらすコンセプトを考案することに挑戦しました。新しい区民として、渋谷の歴史やコミュニティについて学びながら、未来の新しい可能性を夢見ることを楽しみました。

審査員コメント

この応募はすでに渋谷に存在するものではなく、神宮通公園にアーティスト・イン・レジデンスを作る、といういわば渋谷への提案です。今回の募集は「すでに渋谷区内にあるもの」を対象としているのですが、それをおいて審査チームは応募者の渋谷の読み込みにただ驚きました。「渋谷では、音、看板、人々、建物の数の多さに圧倒されるがこれらは調和し、ファッション、テクノロジー、観光、起業が卓越し、発展する完璧な混沌を生み出している。これは渋谷が創造性を活用して変化と多様性を受け入れることができることによる」(一部審査チームが要約) この描写はとてもストレートに渋谷を表しているように思います。一方で華やかな側面だけを捉えているのかな、という杞憂は、「アーティストと一般の人が繋がり、協力し、意味のある対話を生むアートを想像するための拠点として、アーティスト・イン・レジデンスを作りたい」という社会的な説明で安心に変わります。

このような洞察力和意識を持ったクリエイターが渋谷をベースに創造活動を行なって、いずれこの賞の対象となるような実作品を社会に送り出してくれることを願っています。

所在地：渋谷区渋谷 3-22-7

応募者：平井 啓介



応募理由

渋谷川の遊歩道を散策すると川のゆらめきがそのまま高層ビルの外壁に投影されて宇宙までのびる様子うかがえる。

審査員コメント

渋谷駅周辺の一連の再開発はこれまで手付かずだった渋谷川下流周辺も含まれ、「リバーストリート」が誕生しました。正面にそびえる超高層ビルのファサードにはこの川の流れを意識した揺ぎを写し出したようです。

その渋谷リバーストリートに設置された「KISS TOKYO」のパブリックアートから渋谷ストリームを望む画像が応募理由として添えられています。

リバーストリートとなる以前、河川の両側は側道もなくビルの裏側であり捨てられ手がつけられない場所だったのですが、遊歩道を設定することやアートを取り込むことで人の流れを呼び込めました。

応募の動機は今まで隠されていた水辺空間の利用という渋谷の取り組みに、新たな魅力を見い出せたことによるのではないのでしょうか。

所在地：渋谷区神南 1-7-3

応募者：大庭拓也＋大和田卓



イベント屋上に組み換えできる木外装



応募理由

渋谷区立北谷公園は、新たな渋谷カルチャーを活性化することを実現するために従来の設計者の役割を拡張して「設計事務所が地域連携型の公園の設計だけでなく《運営》を行う」具体事例として、応募させて頂きます。以下、詳細な応募理由です。

渋谷・神南エリアに位置し、かつては薄暗く閉ざされた公園であった北谷公園。渋谷区初の Park-PFI 事業により、2021 年 4 月リニューアルオープンしました。

セレクトショップが立ち並ぶ地域でありながら、近年は空きテナントが増加する課題も抱える同エリアの価値を最大化するために、近隣地域の多彩なプレイヤーが自らの活動の場所として使えるプラットフォームとしての公園を実現しました。そのための空間（ハード）と運営（ソフト）を一体的にデザインし、「渋谷の新たなカルチャー」を活性化する公園を目指しています。

1. 閉鎖的な公園から開放的な公園に。
2. 周辺地域の価値向上に向けた「設計事務所が主導する」地域連携型の公園運営
3. イベント屋上に組み換えできる木外装

審査員コメント

応募文にいてないに説明されているように、典型的な従来型の公園を、現代にフィットした自由度の高い公園にリニューアルするにあたり、ハード面においてもソフト面においても様々な工夫を凝らしたプロジェクトです。とりわけ、敷地のレベル差の活用、プラットフォームとしての再定義、設計者によるマネジメント、外装ルーバーの仮設利用などに目を引かれました。渋谷区の Park-PFI 事業だからこそ実現できた取り組みであると思います。

今後、企画されたイベントだけでなく、多彩な「地域プレイヤー」達に自発的に活用されると「渋谷らしさ」がグッと増すように思います。

一点だけ、園内の建物が大き過ぎる感じがしました。キオスクのような小さな店舗やキッチンカーだけに抑えて、「公園」のリニューアルだけにするとどうなったかなあ、と思いを巡らせます。応募写真に公園の全体像がわかるものがあると公園の全体構成や各所の工夫がより伝わったかもしれません。

所在地：渋谷区渋谷 2-24-12
スクランブルスクエア屋上

応募者：二村 玲



応募理由

渋谷のド真ん中であって、屋上の公園のような場所です。訪れた人たちが思い思いに寛いで過ごしているのが印象的で、確かに渋谷にいるのに渋谷じゃないような不思議な感覚を覚えます。今までのビル型展望台にはないような設えが随所に溢れています。透明ガラスで囲われた最上フロアで見るマジックアワーの景色も圧巻です。

審査員コメント

「超高層ビルは都市の袋小路である」と分析した有名な建築家があります。なんらかの目的、例えば仕事をやる、食事をやる、宿泊する、などを持った人々が高層ビルの中に入っていきけれど、その先に都市は続いておらず、帰りはただ元来た道に戻るしかない退屈なビルディングタイプだ、という論理です。

このスクランブルスクエアでは地上 229m の高さに展望台があり空に大きく開いています。『SHIBUYA SKY』という名の通り、地上から解き放たれて空を感じる、日常を忘れて自らも開放する、ことができるように思います。

都市の袋小路を空に向けて開放する、すなわち都市を空に繋げる新しい試みであると考え、先駆的都市、渋谷が最適な実験の場所であったと思います。

「展望せよ、世界。自分。未来。」コピーも秀逸です。

所在地：渋谷駅前

応募者：MINAE U



応募理由

幼稚園の時から大学院を卒業するまで渋谷に通っていました。確か小学 2 年生の時に普通の交差点が見たことのない渡り方に変わり、みんなが一斉に動き出すのがなんだか面白くて、友達と一緒にわざと違う方向から渡ったりして遊んだ記憶があります。世界でひとつしかない交差点と聞いて、毎日通るのを自慢に思ったりしていました。

その頃から渋谷はどんどん変わりお洒落で若者が集まる街になり、今では渋谷に慣れ親しんだ私も戸惑うほどになりましたが、スクランブル交差点だけは何も変わらず、ハチ公や 109 と共に渋谷らしい風景だと思います。

審査員コメント

幼少の頃からずっとこの交差点を利用してきた応募者の「交差点愛」が文面から伝わってきました。写真からは真夏の暑さだけでなく、この交差点特有の熱いエネルギーが感じられます。

建物が更新されて街並みが変化していても、交差点は都市のヴォイドスペース、いわば大きな空間としてずっとそこに存在していて、そのためにランドマークとなり得たこと、に気付かされます。

単に大きな空間でそこには何も無いのに、世界中にこの場所が知られるようになったのは映画「ロストイン・トランスレーション」のおかげもあると思いますが、何よりここでは人が主役であるからだと思います。カートで交差点を渡りながら都市の喧騒を肌で感じ、人の波の中で改めて自分の存在を見出すのではないのでしょうか。

所在地：渋谷区宇田川町 28-15

応募者：常岡 晋太郎



応募理由

10 代の頃待ち合わせに使った懐かしの場所で、長年渋谷に存在する店舗だからです。

審査員コメント

宇田川を暗渠化して作られた渋谷センター街は、かつては宇田川有楽町と呼ばれて栄えた繁華街でした。昭和 36 年には街づくりの体制を整えるために「渋谷センター商店会」が結成され、次第に 10 代前後の若者が多く集まる街として発展してきました。「渋谷カジ」や「コギャル」など、センター街発の若者ファッションは、異質な文化を受け入れる渋谷らしさの象徴でもあると言えるでしょう。そんな中で 1982 年に渋谷エリアで最初にオープンしたというマクドナルドの「渋谷センター街店」は、40 年以上に渡って長らくセンター街の一角を担ってきました。

日の傾きを感じる応募写真とコメントから応募者の深い郷愁を感じると共に、センター街の歴史に思いを馳せることができました。

所在地：渋谷区本町 1-1

応募者：三輪 英生



応募理由

背景に見えるお隣の東京オペラシティは同じ建物なのに新宿区。なぜこのような事に？

審査員コメント

1986 年に国際コンペによって選ばれた設計による建物です。

当選案は JIA 渋谷のメンバーでもあった故柳沢孝彦氏によるもので、応募案はベルナール・チュミヤハンス・ホラインなど海外の錚々たる建築家から勝ち抜かれました。

新国立劇場は渋谷区にあり、隣接するオペラシティは新宿区ですが建物は一体で設計され、応募者の疑問に答えるならば、たまたま区境の敷地に建設されたということです。

この建物は渋谷区内の有数の文化施設であり完成度の高い建物には違いないのですが、今回の渋谷アーキプライズ応募にあたり、応募者の方がこの施設のどこに注目点をされたかの説明があると良かったと思います。

所在地：渋谷区宇田川町 14-13

応募者：小澤拓夢、鈴木大輔（代表者）



応募理由

世代を超えて様々な人が吸収する場所の意味を込めて『Sponge』と名付けられた場所。ここでは、大学生が編集長を務める「渋谷新聞」「原宿表参道新聞」や渋谷の企業が破棄になりそうな食材を使った「子ども食堂」など様々な活動が行われている。新聞の編集会議では大学生や高校生による活動報告が飛び交い、Sponge 運営者と大学生が共同で新店舗の企画会議をしたり、地方の子供達のグリーンツーリズム会場としての場所の無償提供など「教育機会を与える」を目標に様々な活動が行われている。

その他活動例：渋谷 30 プロジェクトへの無償貸し出し / 徳島の高校生との交流イベント / 高校生・大学生を対象とした起業イベントの開催 / プロの編集者を呼んで、新聞編集者（大学生・高校生）へのライター講座開催 / 企業と高校生の交流会開催

審査員コメント

かつて、地域住民の学習拠点や交流の場といった活動の場は、市区町村が運営する公共施設である公民館やコミュニティセンターが担ってきました。公共施設であることから非営利であることが前提であり、活動に制限が生じてしまいます。そのような制限の外に出て、世代を超えて様々な人が集まり活動していく共創拠点として「Sponge」という場所があり、そこで渋谷について考え、育て、情報発信していくことは、渋谷という街の将来に対しての大きな期待となっていることでしょう。

とても素晴らしい活動であると思います。

所在地：渋谷区神宮前一丁目

応募者：CANAKO



応募理由

原宿駅竹下口を出てすぐ、明治通りまでを繋ぐ竹下通り。約 360 メートルほどの通りの両側には、お店がぎっしりと立ち並び、流行の最先端の服や雑貨などを実際に手に取って見ることができる、当時 10 代の私にとっては都会的で非日常的な世界で、憧れの場所でした。特別な物は売られていないのだけれど、全てが輝いていて、魅力的な空間でもありました。

時代の移り変わりにより、物や流行は変化していくけれど、憧れは変わらないし、色褪せることもなく、キラキラした世界が今も広がっています。

竹下通りが、今も若い世代の人達や世界中の人々を惹きつける空間になっていることをとても嬉しく思っていますので、この度応募させていただきました。

審査員コメント

人が大勢集まる場所というのは、人々の期待値が高い場所、と言い替えることができます。歴史を感じるために古都を訪れる、ご来光を拝むために山に登る、今は SNS にアップする写真のために「映える」場所に出かける、などもあるかもしれません。

正式には竹下商店街というこの通りには、憧れのグッズを手に入れる期待、流行りの飲み物や食べ物への期待、都会を象徴する夢の場所へ出かける期待感など、とりわけ若い世代の期待値をグッと上げる秘密があるに違いありません。

通りなので中心はなく、一つの目玉商品があるわけでもなく、常に若者の高い期待値を維持する竹下通りとは、実体を超えてむしろ「現象」であるように思えます。

所在地：渋谷区神宮前 3-27-3

応募者：小澤 拓夢



応募理由

原宿キャットストリートにある立ち食いうどん屋。

近所で働く美容師や、アパレルで働く人が短時間でランチが済ませられる場所として重宝されており、グルテンフリーを求めた外国人旅行者も多く訪れている。

建物は裏原らしい小さな木造建築で、店舗の面積は厨房含めて 22㎡しかない。特徴的な絵が描かれた外壁は前テナントであるパン屋から変えず引き継いでおり、コロナでテナントが撤退し活気がなくなった時も変わらずにあったため、近所で働く人にとっては懐かしい風景になっている。

審査員コメント

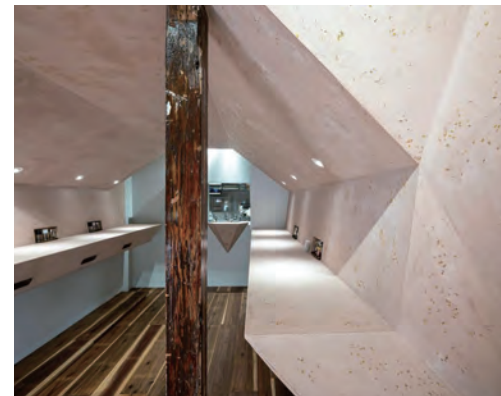
とてもユニークでパワフルな外観に目を奪われました。内部空間も普通のうどん屋さんとは異なり、彫塑的なミニマルデザインになっているように見えます。おそらく住宅＝民家を改装したものと想像します。

キャットストリート自体が過去的生活インフラであった渋谷川の暗渠上が再利用されて歩道になり、更には「裏原系」と言われるジャンルを生み出すほどのファッショナブル・アレイに変身したのですが、建築においても用途を超えて長く使われることは、カーボンニュートラルに繋がるサステナブルなことと言えます。

リユースにおいて大切なことはなんと言っても企画とデザインですが、ここではデザイナーが最大限に元気な力をまちにに向けて発信しているように見えます。これはとても渋谷らしい、のではないのでしょうか。

所在地：渋谷区神宮前 3-27-3

応募者：西丸 健



応募理由

原宿を代表する通りに面した建築をリノベーションしてできたうどん屋さんです。

2階に古い外壁を残しつつ、1階はポップな色使いで外観を更新していて、時間の積層が感じられます。

また中に入ると多面体の空間と古い柱が混在する不思議な空間があり、1つの視点からでは全てを見ることができない「渋谷」を象徴するかのような複雑さとジャズのような即興感のある内装が魅力です。

審査員コメント

今回の応募の中で、ひとつの建築物に対して複数の応募があったのはこのうどん屋さんのみという事実と特異な外観に興味を惹かれると同時に、審査チームのアタマの中には様々な疑問が浮かび上がってきました。このペインティングは本当に前テナントのパン屋さんからのもの？ だとするとどんなパンを売っていたのか？ パン屋以前は住宅？ 2階バルコニー外壁に貼られている板はいつから？ 突き出ているランタンは何のため？ 紅白のサインポールの意味は？ 更には、この板は不燃材？ 建具は防火設備？ など建物性能のことまで疑問は及びます。

全体としては元気良くまちにアピールしているけれど、デザインとしては様々なものが渾然一体となつて、その氏素性や経緯、理由がよくわからない超力オスな存在、でもそれはそれで「渋谷らしい」という審査チーム内の共通認識となりました。

所在地：渋谷区道玄坂 2-24-1

応募者：染谷 恭子



応募理由

渋谷と言う街はそもそも街自体にファッションの店や書店やレコードショップ、音楽の流れる喫茶店など文化的な要素のある店が溢れていたが、ここ数年の再開発でことごとくそうした暮らしに根ざした文化的な場所が大型ビルに吸収されており、集客力は高まったかもしれないけれど、流動性が少し低下してしまった気がしている。

そんな中で、東急文化村として文化を名前に冠した施設が今も残っているのが、渋谷の良さであると思いたい。パルコにも劇場があり、初台の新国立劇場やオペラシティもあり、文化的な建物はこれからも渋谷区の象徴として残ってほしいと思ったため。

審査員コメント

1989年に Bunkamura が開業し、同年 12 月に日経平均株価は史上最高値を記録しています。ただ単にバブル景気のみがこの大型複合文化施設を生み出したのではなく、そのルーツはかつて演劇、映画、音楽などのエンターテインメントで渋谷で一番の繁華街として賑わっていた百軒店にあります。

渋谷にはその文化的なルーツを継承する映画館、音楽喫茶、ライブハウス、小劇場などが脈々と存在し続けていますが、Bunkamura は規模的にも渋谷の文化度を象徴するものと言えるように思います。

新しい再開発「渋谷アッパー・ウエスト・プロジェクト」の中で Bunkamura がどのように生まれ変わるかが楽しみであると同時に、応募者さんのような「渋谷の文化」のファンが大勢いらっしゃることも都市としての渋谷の財産であると思います。

所在地：渋谷区代々木 5-68-1

応募者：池田 悠太



応募理由：

斬新で高い話題性を持つ一方で、今や近隣住民の生活の中に溶け込んでいる。

審査員コメント

瞬間調光ガラスは実は 40 年近く前に発売され、その後、建築コンペなどで公衆トイレの壁面に使われたり、人が入ると不透明になるというアイデアは幾度となく見かけてきました。隠したい生理行為に関わる器具を色ガラスでアートのように扱い、魅力的にみせるアイデアを公衆トイレの建て替えて実現させたことにとっても期待をしていたのですが、今回見学に行った時には肝心の調光システムにトラブルがあり、使えない状態になってしまっていました。

その機能に全面的信頼性を置いた提案の思い切りの良さを高く評価していたのですが、内部が丸見えのまま放置されている姿をととても残念に思いました。とはいえこういった挑戦も厭わないところが渋谷らしいとも言えるかもしれません。

所在地：渋谷区道玄坂2丁目付近 応募者：鈴木 彩生



応募理由：

昔ながらの渋谷が 今でも最先端の渋谷のカルチャーを担っている無くしてはならない素晴らしい場所のため。

審査員コメント

百軒店の周辺には文字通り数多くのお店がひしめき合っており賑わいを作り出していますが、とても興味深いのはこの地の繁栄と衰退と変化の歴史です。花街（三業地）の隣接地に関東大震災で被災した銀座・浅草の117の名店（キネマ座、上野精養軒、資生堂、山野楽器など）を誘致した商店街として始まりますが、東京大空襲で全てを失います。戦後は映画館や音楽系（名曲・ジャズ・ロック）喫茶などをその特徴にして「大人の繁華街」として渋谷で一番の盛況を誇っていましたが、1970年代以降は開発により渋谷の中心が移動し、ラブホテル街の様相が濃くなります。『Bunkamura』がオープンして21世紀に変わる頃から、新たな小さな映画館や、ライブハウス、クラブなどが少しずつ増えて、かつての映画や音楽系のカルチャーが新しい形で息を吹き返してきます。

大きな資本による駅周辺の再開発により一旦は衰退したこの地が、若者文化を中心として再度活気を取り戻しつつある、ことは何より「渋谷らしい」と言えるのではないのでしょうか。

所在地：渋谷区宇田川町31-1 応募者：櫻井 建人



応募理由：

小さなテナントビルではあるが渋谷の多様性・多面性を表現しつつ品格のあるデザインが世代を超えた渋谷らしさを感じるため。

審査員コメント

いくつもの箱が積み重なったような形態が、種々のテナント個別の存在を直接的に表現しているように見えることから、渋谷の多様性とその集積、賑やかさを直接的に感じることのできる秀逸なデザインだと思います。

回転しながら重なる部分のディテールも巧みに考えられていて、一般の箱型の商業ビルとは一線を画して渋谷の街並みに上質な賑わいを加えています。

一方で、都市において多様性や集積や混沌は共通のものであり、この『Spiral Boxes』は他の多くの都市においても、その効果を発揮できる普遍性を有しているように感じます。

所在地：渋谷区代々木 4-3-6

応募者：田中 亮平



応募理由

渋谷に事務所を構えて設計活動をして 10 年程になります。応募したのはとても小さな案件ですが、渋谷は繁華街と住宅エリアが密接している所が街の魅力の一つでもあると常々思っていました。

応募した案件はその住宅エリアと商業エリアが対立するのでは無く、相互に補完し合いながら共存するあり方を模索したプロジェクトです。些細なアイデア（レシピ）を積み重ねて相互を取り持つ、飲食店にはそんな役割りが相応しいと感じています。小さなオープンスペースはマルシェなどのイベントを通じてそんな役割りを担ってくれています。

審査員コメント

住居系地域の住居密集地において、その主役である「住宅」を改装し小規模に営業することにより、界隈にさざなみを起こすことを企図した計画に興味を引かれました。

食えることは生活上欠かせない行為であると同時に、みんなに共通の楽しみであるので、食をきっかけにこのキッチンに人が集まり、新しい出会いや関係性が生まれるであろうことが期待できます。

旧い住宅地特有の高い壁を取り払い、オープンスペースとしてまちに開こうとする工夫は他でも見られますが、この地においては特に有効に働いているように思います。

このような試みが事業としての継続性を維持し、徒歩圏内の地元を支えるようになると、都市はさらに豊かになると思います。

所在地：渋谷区富ヶ谷 1-16-11

応募者：小田和 直樹



応募理由

この民家を改造した小さなコーヒーハウスが 2012 年に出来てから、周囲の様子は大きく変わった。何よりここを訪れるファンがひきも切らず、人影もまばらだった暗渠の上の遊歩道には、犬の散歩をする人や自転車に乗る人が増えた。後追いするように同業のコーヒースタンドの数が増え、更には他のこれまでとは異なるタイプの数多くの飲食店が生まれ街を活性化し、ついには「奥渋谷」というエリアネームが生み出されるに至った。今では世界中から訪れる外国人旅行者達でこのカフェは毎日溢れていて、彼らのここに至る道中における経済効果も少なくないと思われる。

役目を終えた民家の再生が、かつての小川の上に人の流れを呼び戻し、地域の活性化にまで貢献したというまちおこしは、感度の高い「渋谷の奥」だったからこそ実現したと思う。もっと言えば、大きな資本を投下せずとも、差別化された特徴的なコーヒーとセンスあふれる居心地のよい空間を提供すれば、単価の限られたコーヒースタンドもビジネスになり得る、という企画がここから始まり世界中に小規模コーヒーロースタリーの流行を広めたと言える。ビジネスモデルとしても極めて「渋谷的」なのである。

審査員コメント

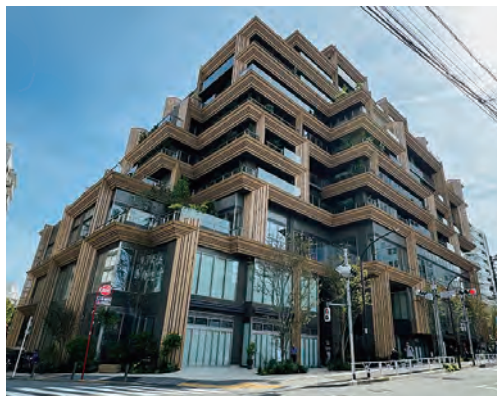
2012 年頃まで、神山通りから代々木八幡に向かう辺りは「裏渋谷」と呼ばれていて、少し寂しいながらも大人向けの個性的な飲食店があったことにより、渋谷の奥座敷のような雰囲気もあったように記憶しています。

ちょうどこのノルウェーから来たコーヒーハウスが登場した頃に、いくつかの若い感性による新しい業態による店舗が周辺に増え、いつの間にか「奥渋谷」という呼ばれ方が聞こえてきたように思います。一つの強い中心やリーダーシップによらない、同時代性を共有したいくつかのニューウェーブが同時進行し、このエリアに変化をもたらしたことは、何より渋谷らしいことだと感じます。

民家を更新して世界的に有名になったこのお店に向かって暗渠になった宇田川の上を大勢の観光客が歩く、という光景をいったい誰が想像できていたでしょうか？

所在地：渋谷区代官山 20-23

応募者：山田 潤太郎



応募理由

「Forestgate Daikanyama」は『職・住・遊 近接の新しいライフスタイル』提案をコンセプトとした複合施設です。MAIN 棟は、街に賑わいをもたらし、本物件の住民だけではなく、来街者・周辺住民にも豊かで新しいライフスタイルを提案する魅力的な商業ゾーンが広がっています。

駅と八幡通りをつなぐアプローチ沿いにそれぞれの店舗が顔を出し、緑豊かな吹き抜けが広がっており、豊かな時間が流れるその場所には『緑・環境サステナブル』と『食』を主軸とした、代官山ライフを実現するのにふさわしい店舗を揃えました。

「TENOHA 代官山」は『循環する建築』をコンセプトとして、以下「3 つの循環」の実現に取り組みました。

1. 森と都市の循環
2. 移築・再利用による循環
3. エネルギーの循環

審査員コメント

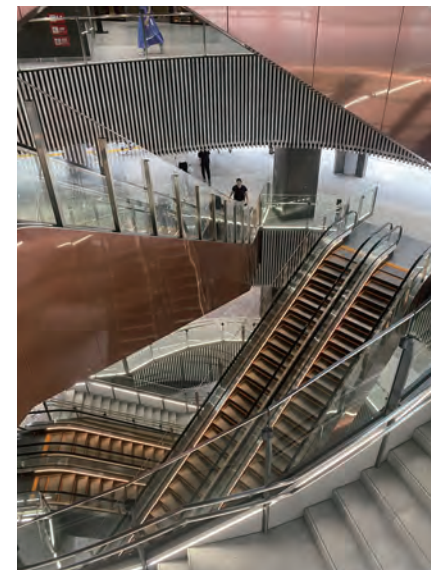
代官山の中でも、旧山手通りとは少し趣の異なる八幡通りに面して計画された、緑と環境を感じることを目標とした共同住宅を中心とした再開発計画です。かつてこの敷地の向かい（現代官山アドレス）には1927年に竣工した『同潤会代官山アパートメント』という安全に都市に住まうことを目的とした36棟337戸からなる、建築史に残る集合住宅群がありました。今もその頃も「職・住・遊の近接」は都市生活の醍醐味ですが、近年は不動産価額や建築費の高騰など本質的な課題があり、誰もが簡単に実現するのは難しくなっています。

また、環境負荷の大きい建設プロジェクトにおいては、エンボディドカーボンを含め、少しでも環境サステナブルであることが求められています。この双方の課題は簡単にクリアできるものではなく、建築家だけでなく多くの関係者のアタマを悩ませています。この計画がそのコンセプトと共に課題解決に向けたイメージリーダーとしての役目を果たしてくれることを願っています。

所在地：渋谷区桜丘町 1-4

応募者：池上 溪太

渋谷区サクラステージ



応募理由

渋谷にある縦移動動線は、入り組み、複雑化されたものが多い気がします。

審査員コメント

渋谷は渋谷駅を一番の低地とした谷戸地であるため、駅への往復には坂道を登ったり下ったりする必要があります。道玄坂、宮益坂といった坂の多さや、246号線、青山通り、公園通りのアップダウンに表れています。加えて昔からの鉄道、山手線、銀座線、井の頭線は高架線であり、近年の大深度技術により半蔵門線＋田園都市線、東横線＋副都心線は地下鉄、といったように少し前の未来都市図さながらに極めて複雑で高低差のある交通ネットワークが渋谷の特徴となっています。

それらを繋ぐためには垂直動線が不可欠であり、これまでの階段やエレベーターに変わり開発されたのが『アーバンコア』と言われる写真の吹き抜けとエスカレーターです。確かにこれは独特の地形に基づいた「渋谷らしい」動線構築物であると言えます。

所在地：渋谷区神宮前 6-20-10

応募者：上野 貴子



応募理由

旧宮下公園の跡地に建てられた複合施設ですが完成した当初直ぐに、実際に自分自身がこの施設を全て体験して SHIBUYA - LIFE を感じてみた場所です！！

渋谷の新しい空気も感じましたし、商業施設で飲食店やカフェ、渋谷横丁、セレクトショップのほか、敷地内にある公園やホテル、アート・音楽からスポーツまで欲張りすぎるということだと思いますが、ここまで詰め込んだ施設は他には無いと思いました。

公園の緑も存分に残し街と共存し環境に優しく街を豊かにしてくれていると思いますし実は癒しスポットだなんて思っております。ホテルシークエンスミヤシタパークもすごくシンプルで少しスタイリッシュな内装も主張がなく自然な感じが良かったですし、ホテルでの朝食も少し上品でヘルシーで心豊かにしてくれました。多くの方々がこの MIYASHITA PARK に立ち寄り、集い、交流し楽しみ癒されているだろうと思いますので、こちらを推薦しました。

審査員コメント

「渋谷らしさ」の取り込みを最大の目標とした、大きな資本による極めて大掛かりなプロジェクトです。最大のコンセプトである「従来の宮下公園をリフトアップ」したルーフトップパークには驚くほど多くの人が集まっており、都市の中にこういった自由度の高い場所が求められていることを改めて教えてください。もしこれが廃線の高架を利用した NY の『ハightライン』のように、従来の都市インフラを転用・再生したものであったりしたら・・・というのは望みすぎかもしれません。

この巨大な構築物が時代を超えて都市のレガシーとして長く愛される頃、屋上にかかる梁を薦が多い天蓋となる頃に、真の「渋谷らしさ」を纏うように感じます。「今ではなく、これから」が問われる大きな試みだと思います。

所在地：渋谷区神南 1-5-11

応募者：有田 真理恵



応募理由

代々木公園の自然豊かな緑、ケヤキ並木の緑が綺麗でその先に見える代々木競技場のフォルムが好きだからです。

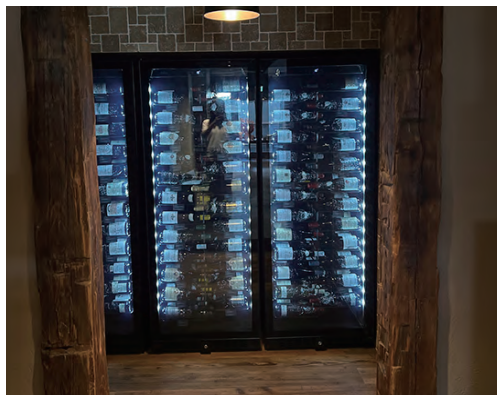
審査員コメント

とても渋谷らしく、また代々木公園のみならず東京や日本を代表する風景だと思います。1964 年の初めての東京オリンピックに向けて綿密に計画された軸線、道路、植樹、公園、体育館などが一体となって美しい風景を作り出していて、第一・第二体育館とも 60 年を経て東京の重要なレガシーとなっています。

このケヤキ並木（プロムナード）は、代々木公園に沿って原宿駅から富ヶ谷に向かう放射 23 号に直交し、この道路も同じくケヤキ並木で整えられているため、歩行者は公園と競技場を左右に見ながら、緑陰の中を歩くことができます。審査チームのお勧めは、放射 23 号にかかる歩道橋の上からの眺めです。地上 6m を超える橋の上からは、登ったケヤキの緑の中から眺めるようにこの一帯の優れた風景を楽しむことができます。

所在地：渋谷区西原 1-50-8

応募者：笹野 優



応募理由

今回応募させていただいた建築は、2024年6月30日にオープンしたLa Caveという店舗でワインショップとカフェの店です。La Caveはワインショップがメインではありますがカフェや物販にもこだわっており、コーヒーは徹底した品質管理のもとスペシャルティコーヒーを提供しております。

今回応募させていただくにあたり渋谷らしさを私なりに考えた際、渋谷は唯一無二のデザイン性に優れた街、近代的で若者の街というイメージがあります。しかしながら、その中にもどこか懐かしさを感じられる建造物やスポットに溢れているような近代と現代、未来が融合する街の印象を持ちます。

La Caveがある渋谷区西原もお店の周りは古く地元の方から愛されているような店舗、住居があるかと思えば新しくできた洋服屋や店舗が集まっていたりもします。そんな土地で造られたLa Caveですが、店舗の由来はフランス語で地下という意味です。実際の店舗も地下にあり、隠れ家のような雰囲気のお店です。隠れ家は秘密にしたいけど大切な誰かには話したくなるような場所ではないでしょうか。渋谷はたくさんのカルチャーが集まる場所ですが、その中で広まってほしくない隠れ家のような安らぎを感じられる店が近所にあったら古くから愛される渋谷のようだと考えます。ぜひ、こちらのLa Caveを多くの方に愛される渋谷のスポット、建造物として知っていただきたく応募させていただきました。

審査員コメント

店名に表されるように、都市の奥深くにひっそりと存在し、その快適な居心地から多くの人に愛されるまさに「隠れ家」的な存在価値のあるお店であると思います。商業地域の大型店舗だけではなく、住宅街の中に点在する小さな素敵な飲食店は間違いなく都市の魅力の一つです。

渋谷らしさを直接的に訴求するデザインやアクティビティはなくても、都市渋谷を密やかに支える役割を担っているお店だと感じます。ぜひ一度プライベートで訪れて美味しいワインを楽しみたいと思います。

所在地：渋谷区富ヶ谷 2-43-15

応募者：南條 嘉人



応募理由

代々木公園の目と鼻の先にある小さなコーヒースタンド「Little Nap COFFEE STAND」と、富ヶ谷の井の頭通り沿いでコーヒーを煎るいい香りが漂うコーヒースタンド「Little Nap COFFEE ROASTERS」の2店を運営する、「Little Nap COFFEE」のオーナーで、大のミュージックラヴァーでもある濱田大介氏を慕って多種多様な音楽関係者やクリエイターが集い、ここで数々のプロジェクトが産声をあげている。

「Little Nap COFFEE ROASTERS」の3Fのイベントスペースでは、その日たまたま居合わせた有名ミュージシャンによって即興演奏が始まるなんてこともあり、まさに渋谷の音楽シーンの一旦を担っているとも言える。

審査員コメント

この店の周辺にはコーヒーの焙煎の香りが漂っています。

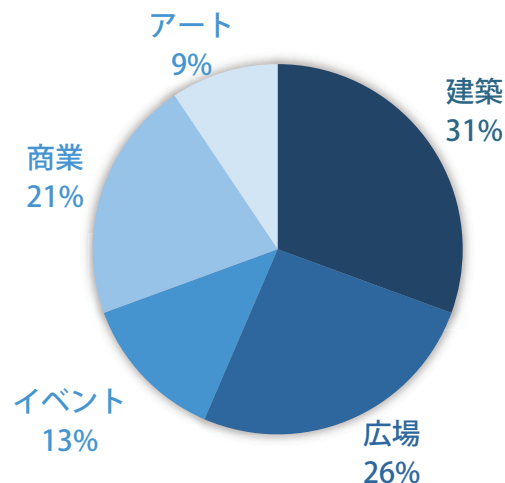
もしかしてこの香りがランドマークとなり音楽コミュニティを広げるのでしょうか。

この提案では他で扱われなかった渋谷らしさの要素の一つとして音楽があるのを思い出しました。そういえばJAZZ、ラテン、ロック、そしてクラシックを求めて渋谷に集まる人たちはとても数多くいます。

ライブハウスや音楽を聞かせる喫茶、クラブなどなど少しニッチなジャンルから広域のものまで、渋谷的な傾向を感じることができます。

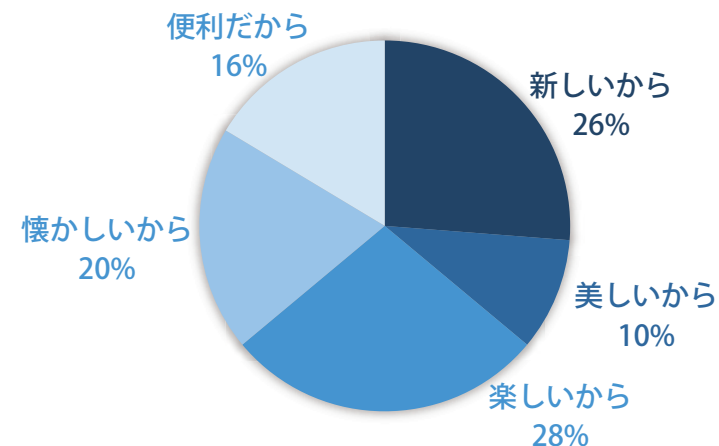
おそらく各地でこの応募の場所のように引き継がれているのではないのでしょうか。

対象に含まれている要素



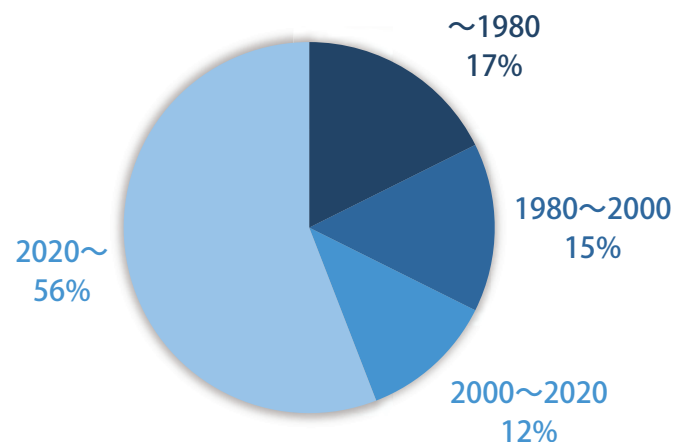
応募対象の6割に建築と広場が含まれていることは、屋内外に関わらず何らかの空間/スペースが重要なファクターであることを示している。商業に関わるのは大きな商業地域を抱える渋谷ならではのあり、アートの比率が比較的に少ないのは、ここでは建築を含まず、音楽、演劇、芸術などをカウントしていることによる。

推薦した理由



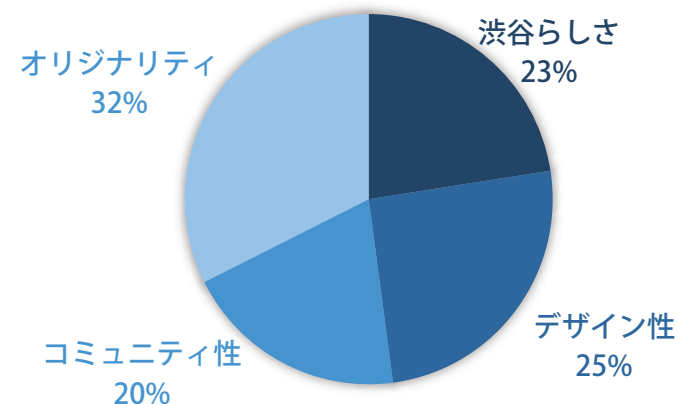
推薦した理由については、応募者の体験や思い出、印象によるものが8割以上を占め、対象の利便性や機能性への言及は少なかった。

対象が造られた年代



応募対象が造られたもしくは発生した年代について、2020年代以降の新しいものが半数を超えているのは、新しい企画や場所が「渋谷らしさ」として多く評価されたことを表す。同時に1980年代以前から続く都市のレガシーも少なからず渋谷に存在することが示された。

審査の評価基準



応募対象の多くが複数の評価基準に合致したため、4項目の中で大きな差異はないが、応募対象の独自性・オリジナリティによる評価を受けたものが一番多い結果となった。

全応募レビューと現地視察

JIA 渋谷地域会では全 34 の応募についてレビューを実施、その後 SHIBUYA DISCOVERY TREKKING（地域会が恒例で主催するまち歩き）の中で現地視察を行いました。



2024.10.24 JIA 渋谷例会での全作品レビュー



2024.11.23 JIA Discovery Trekking での現地視察



受賞者に送られるトロフィー

JIA 渋谷アーキプライズでは、区内で発生した廃材を再利用したトロフィーの制作を企画し、1 年以上前から準備を進めてきました。



伐採前のケヤキ（渋谷区西原 3 丁目）



樹齢 30 年を超えるケヤキの年輪



製材所での一次加工



トロフィーデザイン・制作：MATHRAX 久世 祥三 久世 茉莉子

募集フライヤー



JIA SHIBUYA ARCHI PRIZE 2024

主催：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 渋谷地域会
後援：渋谷区

渋谷のケンチュウ賞、始まります！

「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」は、渋谷区内にある建築や広場などで、「渋谷らしい」デザインや工夫により、楽しい体験、新たな感動、刺激または安らぎを与えている「＜渋谷的な＞場所や取り組み」を公募し、その中から JIA 渋谷地域会が建築家の視点で数点を選び表彰するイベントです。多くのみなさんからの「渋谷らしさにあふれた作品」の応募をお待ちしています。

応募期間：2024 年 8 月 1 日（木）～ 2024 年 9 月 30 日（月）
応募資格：どなたでも応募できます
推薦対象：渋谷区内にある「渋谷らしい」建築、広場、内・外部空間、活動等、一般の方の目に触れて体験・参加できるもの

作品のご応募はこちらから！



応募要項



JIA SHIBUYA ARCHI PRIZE 2024

【応募要項】

□主旨

公益社団法人日本建築家協会（JIA）は私たち「建築家」の役割を、単に建造物をつくることだけではなく、その場を使う人たちの活力、成長、笑顔をつくることであると考えています。ここで暮らしてよかった、このまちが好きだ、というように地域の持続に必要なジビックブライドを育み、良い循環や新しい生き方も生み出すような環境づくりに「建築家」の創造性を生かしていきたいと私たちは願っています。

「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」は、渋谷区内にある建築や広場などで、「渋谷らしい」デザインや工夫により、渋谷のまちで生活や仕事をし、または国内外から渋谷を訪れた人達にも、楽しい体験、新たな感動、刺激または安らぎを与えている「＜渋谷的な＞場所や取り組み」（以下作品と言います）を公募し、その中から JIA 渋谷地域会が建築家の視点で数点を選び表彰する、という JIA 渋谷地域会が渋谷区の後援を得て、初めての試みとして行うイベントです。多くのみなさんからの「渋谷らしさにあふれた作品」の応募をお待ちしています。

□賞

アーキプライズ 2024 賞：2 点

※2024 年秋以降に渋谷区役所にて授賞式を行う予定です。

※表彰対象は作品または関係者とし、表彰作品の関係者および応募者に通知いたします。

□主催者

主催：公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部渋谷地域会（JIA 渋谷）
後援：渋谷区

□応募期間

2024 年 8 月 1 日（木）～ 2024 年 9 月 30 日（月）

□応募料

無料

□応募資格

どなたでも応募できます

※自画他画は問いません。表彰対象は作品とします。

※グループの場合、代表者を 1 名定めてご応募ください。

※年齢・国籍は問いませんが、日本語での対応をお願いします。

□推薦対象

渋谷区内にある「渋谷らしい」建築、広場、内・外部空間、活動等。一般の方の目に触れて体験・参加できるもの
（例：建物、公園、店舗、広場、屋外広告、展覧会、まちづくり等）

公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部 渋谷地域会



□応募方法・提出物・提出先

JIA 渋谷地域会ホームページから「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」ページ <https://jia-shibuya.org/award> に入り、「応募ボタン」をクリックすると表示される「応募フォーム」に必要事項を記入の上、写真を添付し、送信してください。「JIA 渋谷アーキプライズ 2024」には右記 QR コードからも入れます。



※応募フォームへの入力は、応募締切日の令和 6 年 9 月 30 日（月）23：59 まで可能です。なお、到着および受付の確認に関するお問い合わせには対応しません。

※1 個人または 1 グループあたり 1 点の応募が可能です。

※送付する写真の容量などは「応募フォーム」の指定に従ってください。

□応募に関するお問い合わせ

お問い合わせは、下記よりお送りください。

<sap2024@jia-shibuya.org>

□審査基準

- ・渋谷らしさ
- ・コミュニティ性
- ・オリジナリティ
- ・デザイン

※審査基準・審査経緯・審査方法などについては公開いたしません。また審査結果については、いかなる抗議も受け付けません。

□審査員

（公社）日本建築家協会関東甲信越支部 渋谷地域会内審査チーム

□応募条件・権利規定および応募に関する諸注意

※応募対象は渋谷区内にあるもので、一般の方が日常、自由に目視・体験できるものに限りません。

※応募フォームで利用される写真画像は、応募者自身が撮影したものに限りません。※提出された写真と文章データは原則として返却いたしません。必要な場合はあらかじめ控を預けた上でご応募ください。

※受賞の発表にあたっては、応募写真と異なる写真を用いることがあります。※写真撮影他、応募に係る費用はすべて応募者でご負担ください。

※主催者は応募フォーム受理後、その管理について万全の注意を払いますが、天災、その他不慮の事故・破損・紛失については一切の責任を負いません。

※応募要項に記載された事項以外について取り決める必要が生じた場合、主催者の判断により決定します。応募者は、その内容に同意できなかった場合は応募を撤回できますが、応募にかかった一切の費用は返却いたしません。

※公序良俗その他法令の定め反するもの、誹謗中傷を含むもの、著作権その他第三者の権利を侵害しているもの、著しく法律から逸脱しているものは、審査の対象外となります。また、受賞発表後であっても、これらの条件に反していることが判明した場合、受賞を取り消します。なお、その場合に生ずる損害については賠償は一切行われません。

※応募内容及び応募者に反社会的勢力の活動を助長する行為が判明した場合、審査の対象外となります。受賞発表後に判明した場合であっても、受賞を取り消します。また、その場合に生ずる損害については賠償は一切行われません。

※審査において、応募フォームの内容についての問合せをすることがあります。※主催者は、受賞対象、応募者氏名などをウェブサイト、展示会、プレスリリースなどで発表することがあります。

※応募者の個人情報の取扱いにつきましては、この賞への応募以外の目的に使用いたしません。



**JIA SHIBUYA
ARCHI PRIZE
2024**

JIA 渋谷アーキプライズ 2024 全 34 応募募集

写真撮影 /Photo Credits

P.6-41 : 当該ページ応募者

P.44-45 : JIA 渋谷、MATHRAX



<https://jia-shibuya.org>



@ JIA 渋谷

発行人

日本建築家協会 関東甲信越支部 渋谷地域会 / JIA 渋谷

The Japan Institute of Architects, Kanto-Koshinetsu chapter, Shibuya branch

不許複製 All rights reserved

